【52】本の没落

ここ数年、終活作業の一環として長年かかって貯めた（貯まってしまった）書籍の処分を、本人は熱心にやっている積りですが一向に進まないのです。

最大の理由は、本が好きで、ペットや家族みたいなものだから見捨てられないことにあります。

もう一つの理由は、今は入手が困難な本いわば貴重な本がこの世から失われるのは、偉そうに云えば学問的、文化的損失であり、他の人、他の組織や機関に渡したいと思うのですが、土木学会を含め多くの機関が、よっぽどの貴重本でなければ部外からの書籍の受け入れには消極的です。

知人の大学教授ＯＢの言によると、大学でも昔は教授の定年退職時には　"蔵書を大学に寄付してくれ”と頼まれたのが、現代では　"研究室をキレイに片付けてあとに本など置いて行ってくれるな”　と言われるそうです。

捨てるのがもったいない一般向きの本を神田神保町の古本屋に持ち込んだら、買い取ってくれるどころか断られました。

この頃は高齢化時代のせいか、古本は沢山持込まれるが、買ってくれる人が少なくなり、もう置場が無いとのことです。

初めの数巻しか読んでいない、岩波書店版の１８冊揃いの漱石全集を近くの区立図書館へ寄贈すると申し出たら、リサイクル（捨てることらしい）されることがあると承知なら頂きますと、あんまり歓迎した様子がありません。

この頃はもう自分で考えるのも面倒になって、本はまとめてヒモでしばり粗大ゴミとしてゴミ捨て場に出し、あとは清掃局におまかせするという少々無責任なやり方をしています。

デジタル時代になって、情報源としての本の存在価値は失われつつありますが、本には単なる情報や知識の源泉以上に文化的、芸術的な側面があると思うのですが、年寄りの繰り言でしょうか。